

2017年度 修士論文

保育者のスポーツ経験の差が幼児の
運動あそび支援に与える影響について

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 健康スポーツマネジメントコース

5017A323-3

中村 裕

研究指導教員： 中村 好男 教授

目次

第1章 緒言	
1) 背景	4
2) 問題の所在	5
3) 研究の目的	6
第2章 研究	
1) 目的	7
2) 調査対象・方法期間	7
3) 調査項目の設定	7
4) 分析方法	8
第3章 研究の結果	9
1) スポーツへの好意度	9
2) 保育者のスポーツ経験とスポーツ好意度について	10
3) 保育者2人への聞き取り調査	10
質問項目	11
4) 身体的、精神的、社会的要素について	12
5) 運動あそびは必要か否かの自由記述の内容	13
6) 質問紙調査の自由記述で得られた結果を分析	14
7) 結果	14
第4章 考察	15
第5章 結論	16
第6章 その他	17
第7章 引用・参考文献	18
謝辞	

図表目次

図 1	スポーツ好き嫌い・・・・・・・・・・・・・・・・・・	9
表 1	中学時代の部活動の有無と好意度について・・・・・・・・	10
表 2	高校時代の部活動の有無と好意度について・・・・・・・・	10
表 3	スポーツ経験の有無とスポーツで得られると思う要素について・・	12
表 4	運動あそびは必要か否かの自由記述の内容・・・・・・・・	13
表 5	スポーツ経験の有無と身体的要素について・・・・・・・・	12
表 6	スポーツ経験の有無と精神的要素について・・・・・・・・	12
表 7	スポーツ経験の有無と社会的要素について・・・・・・・・	12

第1章 緒言

1) 背景

近年、子どもの体力低下が社会問題になっている。

その原因について国は、平成14年中央教育審議会の答申、「子どもの体力向上のための総合的な方策について」では、「スポーツや外遊びに不可欠な要素の減少」「外遊びやスポーツの重要性の軽視など国民の意識の低下」「子どもを取り巻く環境の問題」「生活が便利になるなど子どもの生活全体の変化」「就寝時刻の遅さ、朝食欠食や栄養のバランスのとれていない食事など子どもの生活習慣の乱れ」に理由があると指摘している。環境の変化やスポーツに不可欠な要素とは、幼児が保育所・幼稚園以外で安全に外遊びができる場所、異年齢の仲間構成される遊び集団、習い事に通うなど遊ぶ時間が限られている。舘林(2015)¹⁾らは子どもの体力、運動能力の低下について空間、仲間、時間の不足を指摘している。

さらに、柳田(2008)²⁾は、就学前、幼児期の運動経験の減少が関与している可能性がある。とし、幼児期に適切な運動経験を健やかな発育発達が促せることが必要不可欠と考えられると述べている。つまり、現代社会において子どもの体力向上を目的に運動の機会を提供するためには幼稚園、保育所での関わりが重要な役割を果たすものと考えられる。

2) 問題の所在

幼児期の運動の重要性については多くの研究で指摘されており、吉武(2014)³⁾は幼児期の運動体験はその後の心身の健康に大きな影響を及ぼす可能性が高く、この時期の身体教育は非常に重要な意味を持つと捉えられているとしている。また、加賀屋(2008)⁴⁾は、身体活動量を増加させることは運動能力向上に結び付くと報告している。幼稚園や保育所で子ども支援にあたる保育者らは、保育所保育指針⁵⁾や幼稚園教育要領⁶⁾に示される“子どもは十分に体を動かすことの心地よさを味わうことで自ら活動することの喜びや達成感を味わうことや、遊びを通して身体機能の発達が促される”を理解し、それに則りプログラムを行っている。

しかし、2002年に厚生労働省で行った「幼児運動能力検査」で、杉原ら(2004)⁷⁾は一斉保育の活動に運動を取り入れている保育所・幼稚園より、幼児が自由に遊び回ることを主体とした自由保育中心の保育所・幼稚園に通う幼児の運動能力の方が高かったとしている。吉田ら(2007)⁸⁾は、自由保育を中心とした園では、子どもの自由な活動の中で、体を動かす機会がより多く確保され、その結果として運動能力の発達に貢献していると述べている。

また、岩崎(2007)⁹⁾は幼児の生活の中心は遊びであり、体を使って遊ぶ「運動あそび」を通して身体を動かす楽しさを知り、運動能力を発展させること、また集団遊びを通して友人関係を築き、ルールを守る・工夫するといった社会性や創造性などの内面的な能力を身につけることができるとしている。一方、柳田(2008)²⁾の、ただ遊ばせているだけでは子どもの運動経験に偏りが生じてくる可能性を示唆している。

自由保育のカリキュラムは園の方針に合わせて保育者がそれぞれの経験で構成している。自由遊びの時間を、ただ遊ばせて終わらせずに、子どもにとってより良い運動経験につなげるためには保育者の運動あそび支援の意識やプログラムの構成力が大きな役割を果たすのではないか。そのためには保育者の個人のスポーツ経験があそびへのヒントとなり、また、意識の強弱が積極的な運動あそび活動の取り組みになるのではないかと考える。

3) 研究の目的

問題の所在にあげたように、子どもの体力低下傾向を認識した上で、保育士個人のスポーツ経験の差が、幼児に対する運動あそび支援に与える影響について調査を行い、その違いを明らかにすることを目的とする。結果を今後の保育士養成カリキュラム構築への示唆につながると考えたためである。

第2章 研究

1) 目的

本研究の調査目的は、「保育士のスポーツ経験の差が、幼児の運動あそび支援に与える影響」を明らかにすることである。具体的には「保育士の子ども時代の戸外遊び」「中・高校生時代の部活動経験」と、「スポーツへの好意度」との違いが、保育所での幼児の運動あそび支援にどのように作用したかを実証することである。

2) 調査対象・方法と期間

調査対象者

東京都、茨城県、埼玉県、千葉県の子どもの保育所6園に所属する現職の保育士107人107人に質問紙を郵送で送付、107人から回答を回収した。
さらに、スポーツ経験のある保育士1人、スポーツ経験のない保育士1人について、インタビューにより聞き取り調査を行った。

調査期間

2017年7月～8月

3) 調査項目の設定

研究で取り上げたい項目、「保育士の子ども時代の戸外遊び」「中・高校生時代の部活動経験」「スポーツへの好意度」について、具体的な質問項目を設定した。

「保育士の子ども時代の戸外遊び」

- ・子どもの頃遊んだ戸外遊び（自由記述）

「中・高校生時代の部活動経験」

- ・中学時代の部活動の有無、きっかけ、年数
- ・高校時代の部活動の有無、きっかけ、年数
- ・大学や専門学校時代のスポーツ経験の有無
- ・部活動の種目

「スポーツへの好意度」

- ・スポーツの好き嫌い（5件法）
- ・子どもにとって運動やスポーツは必要か（5件法）
- ・必要と感じる理由、感じない理由（自由記述）

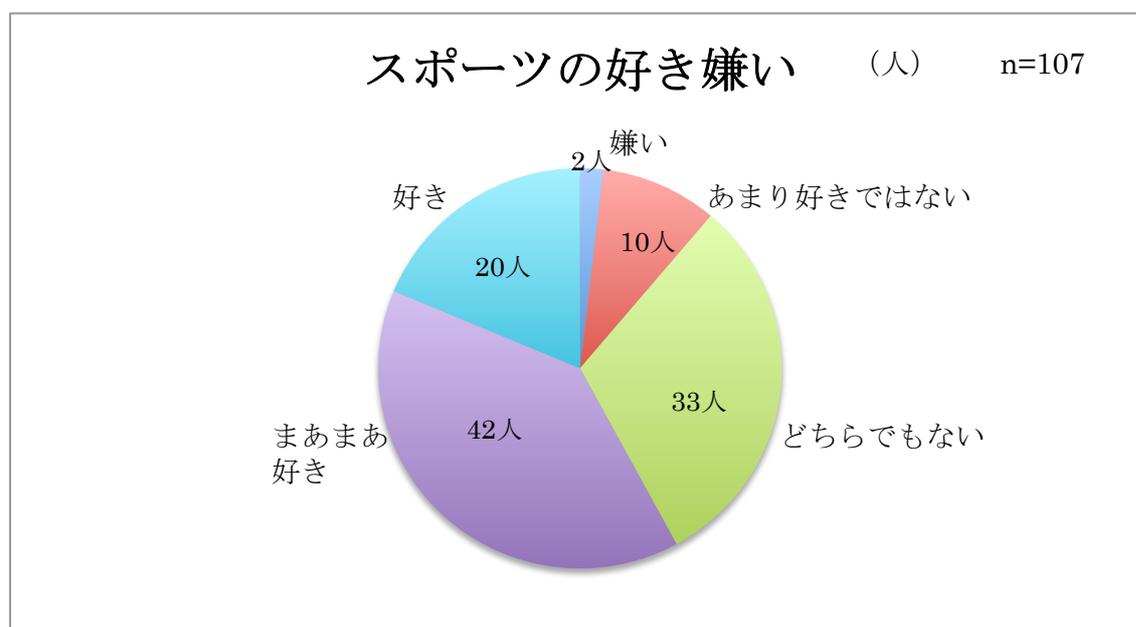
4) 分析方法

調査紙の回答をオッズ比、カイ二乗検定で分析を行った。

第3章 研究の結果

1) スポーツへの好意度について

スポーツの好意度について図1に示す。「スポーツが好き」と回答した保育士20人(19%)、「まあまあ好き」と回答した保育士42人(39%)で、「好き」と「まあまあ好き」の合計が62人、58パーセントであった。一方、「あまり好きではない」10人(9%)、「嫌い」が2人(1.9%)であり、「好きではない」「嫌い」の合計は12人(約11%)であった。



(図1) スポーツの好き嫌い (人)

2) 保育士のスポーツ経験とスポーツの好意度について

保育士の中学時代の部活動とスポーツの好意度についてのオッズ比を表1に、高校生時代の部活動とスポーツの好意度についてのオッズ比を表2に示す。中学時代のオッズ比：11.2、高校時代のオッズ比：9.3という結果になり、スポーツの経験がある保育士はスポーツに好意があることがわかった。

	経験あり	経験なし
好き	56人	10人
嫌い	4人	8人

(表1) 中学時代の部活動の有無と好意度について(人)

OR : 11.2

p = < 0.001

	経験あり	経験なし
好き	58人	21人
嫌い	3人	9人

(表2) 高校時代の部活動の有無と好意度について(人)

OR : 9.3

p = < 0.001

3) 保育士2人への聞き取り調査

さらに、スポーツ経験がある保育士とない保育士の語りから差を見出すために、I 県 M 保育園の保育士に聞き取り調査を実施した。スポーツ経験がある保育士とない保育士では、自らの経験を生かし、幼児に対する運動あそび支援に差が出るのではないか、との仮説をたて質問項目を設定した。

- ・実施日：2017年9月16日
- ・インタビュー：
 - S保育士、保育歴11年 スポーツ経験あり スポーツ好意的
 - T保育士、保育歴8年 スポーツ経験なし スポーツ非好意的
- ・インタビュー時間：各45分間
- ・分析方法：インタビューの語りを逐語録に作成し、支援の方法を分析

・質問項目

1. 保育計画立案時に運動あそびを取り入れるか否か
2. 幼少時に遊んだ戸外遊びは運動あそび支援に生かされているか（内容、頻度）
3. 自由遊び時の保育士の参加度合い
4. 子どもにとって運動は重要だと思うか

項目	S保育士	T保育士
身体活動の取り入れについて	・なるべく、体を使うものを考えている。鬼ごっこやボールや縄を使うなど室内でできないものを取り入れている。	・子ども達の様子を観察した上、決定立案する。運動は好きではないが、子ども達は体を使って遊びたいのではと思う。
幼少時の戸外遊びと運動あそび支援	・今の子ども達が理解できるようにルールを変えるなどアレンジしている。	・昔行っていた鬼ごっこやドッジボールなどを指導している。
自由遊び	・出来るだけ一緒に遊ぶようにしている。バス当番の時は無理なので同僚にお願いしている。	・全員で外に出るときは遊びます。部屋あそびをしている子どもがいる場合は戸外に出ている同僚に任せ、自分は遊びません。
運動は重要か	・丈夫になる。仲間ができる。自分に自信が持てるようになると思う。礼儀や挨拶などを覚えるから重要。	・体力がつく。行動範囲が広がる。

聞き取り調査から、経験有無、スポーツの好意と子どもの運動あそび支援の時間や内容について、保育所保育指針に従い、身体活動を行っていることから双方の差はなかった。インタビューの中で子どもに運動あそびを行う効果として、S保育士は身体的要素以外に精神的要素や社会的要素をあげ、T保育士は身体的要素を多くあげていることがわかった。

4) 身体的、精神的、社会的要素について

「身体的要素」「精神的要素」「社会的要素」について質問紙調査の自由記述の回答について、分析した結果を（表3）に示す。

（表3）に示すようにスポーツ経験がある保育士は精神的要素、社会的要素について、経験のない保育士より高い割合を示した。反対にスポーツ経験がない保育士は身体的要素が高い割合を示した。

	経験あり n=75	経験なし n=32
身体的要素がある	70.6%	84.3%
精神的要素がある	54.6%	43.7%
社会的要素がある	36.0%	21.8%

（表3） スポーツ経験の有無とスポーツで得られると思う要素について（%）

5) 運動あそびは必要か否かの自由記述の内容

3要素について、経験がある保育士とない保育士が運動の効果として期待できる記述を分類した内容を（表4）に示した。

	スポーツ経験がある保育士	スポーツ経験がない保育士
身体的要素	<ul style="list-style-type: none"> ・ 肥満予防 ・ 運動機能向上の基礎 ・ バランス感覚を養う ・ 体力向上 ・ 丈夫な体づくり ・ 身体能力の発達 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 体の発達 ・ 体力向上 ・ 体幹・姿勢の矯正 ・ 運動神経の発達 ・ 生活習慣のバランスによい ・ 健康づくり ・ 筋力の発達 ・ 反射能力の発達 ・ 体づくりの基礎
精神的要素	<ul style="list-style-type: none"> ・ 忍耐力がつく ・ 挑戦する力が身につく ・ 諦めない心が育つ ・ 自己肯定感 ・ 集中力がつく ・ 競争心が養われる ・ 達成感を味わうことができる ・ 自己表現 ・ 行動力がつく 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ストレス解消 ・ 忍耐力がつく ・ 楽しさを覚える ・ 脳の活性化 ・ 集中力がつく ・ スポーツ嫌い回避
社会的要素	<ul style="list-style-type: none"> ・ 協調性がつく ・ 社会性が身につく ・ 友人との関わりが持てる ・ チームワークをおぼえる ・ 礼儀や挨拶をおぼえる ・ 団結力を学べる ・ 仲間意識 ・ 自己表現力がつく ・ マナーをおぼえる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 協調性がつく ・ 人間関係が身につく ・ 仲間意識

(表4)

6) 質問紙調査の自由記述で得られた結果を分析

保育士のスポーツ経験の差と、身体的要素についての期待観

	経験あり	経験なし	合計
身体的要素あり	53	27	80
身体的要素なし	22	5	27
合計	75	32	107

(表 5) スポーツ経験の有無と身体的要素について (人)

$$\chi^2=2.234 \quad p=0.135$$

保育士のスポーツ経験の差と、精神的要素についての期待観

	経験あり	経験なし	合計
精神的要素あり	41	14	55
精神的要素なし	34	18	52
合計	75	32	107

(表 6) スポーツ経験の有無と精神的要素について (人)

$$\chi^2=1.070 \quad p=0.301$$

保育士のスポーツ経験の差と、社会的要素についての期待観

	経験あり	経験なし	合計
社会的要素あり	27	7	34
社会的要素なし	48	25	93
合計	75	32	107

(表 7) スポーツ経験有無と社会的要素について (人)

$$\chi^2=2.064 \quad p=0.151$$

7) 結果

スポーツ経験がある保育士は身体的要素より精神的要素や社会的要素の効果に期待しており、スポーツ経験がない保育士は身体的要素に期待する傾向があるのではないかと推察され、3効果についてカイ二乗検定を実施した結果、有意な差は認められなかった。

第4章 考察

本研究の目的は、過去にスポーツ経験がある保育士と経験がない保育士が幼児に運動あそびを支援する際、意識の違いや考え方、内容や頻度に差があるという仮説に基づき質問紙調査、インタビュー調査をおこない、実態を明らかにすることにあつた。

運動あそびの内容や頻度では、経験あるなしに関係なく、差が無いことがわかつた。理由として、保育士のインタビューの語りから保育所保育指針に沿って保育活動を行っていると考えられる。また、インタビューの語りから運動あそびを幼児に支援する際に「身体的要素」「精神的要素」「社会的要素」についてスポーツ経験がある保育士とない保育士との効果の違いが見出せたため質問紙の自由記述を分析した。結果、経験がない保育士の方が身体的要素の割合が高く、精神的、社会的要素の割合が低かつたことから統計的に検証を行った。結果、有意な差は確認出来なかつた。しかし、自由記述で得られた3要素の割合では明らかにスポーツ経験がある保育士が期待している精神的、社会的要素の記述が多く、双方の差があることから、スポーツ経験がある保育士は部活動で体験する忍耐力や協調性などを学ぶ側面があることで、身体的以外の要素を記述したと推察した。

第5章 結論

保育士が子どもに支援する内容や頻度は、運動・スポーツの過去の経験や好意による違いによって、子どもへの運動あそび活動に影響されるのではないかという仮説に基づいて本研究を進めてきた。しかし、経験がある保育士とない保育士とでは考え方や行う内容に違いはなかった。また、運動あそびで期待できる身体的、精神的、社会的要素の効果については統計的には差は認められなかったが精神的、社会的要素の記述には差が見出せた。

つまり、スポーツ経験がある保育士は精神的、社会的要素に期待している傾向があり経験がない保育士は身体的要素に期待する傾向があるという結論に達した。

第6章 その他

本研究で保育士への聞き取り調査および質問紙調査の自由記述から今後の研究の可能性につながる項目が確認されるので、ここに考察をおこなう。

1) 質問紙調査の自由記述にみる非認知能力

質問紙調査の自由記述からは興味深い記述が見受けられた「子どもにとって運動やスポーツは必要ですか」の質問に対し「忍耐力がつく」「挑戦する力が身につく」「行動力がつく」「協調性がつく」との表現があった。これは、李(2014)¹⁰⁾が示す学校や職場での成功に関連するものとして、やる気や忍耐力、自制心といった態度や行動力の重要性の能力とみられ、近年、重要視されているものである。これは、無藤(2016)¹¹⁾がいう「非認知能力」であり、学びに向かう姿勢として、目標や意欲、興味、関心をもち、粘り強く仲間と協調して取り組む姿勢であり、これからの幼児教育のキーワードと考えられるとしている。また、文部科学省(2016)では近年、国際的にも忍耐力や自己制御、自尊心などの社会情動的スキルいわゆる非認知能力といったものを幼児期に身につけることが大人になってからの大きな差を生じさせることや、多様な運動経験などがその後の学力や運動能力に大きな影響を与えると研究成果から述べられている。

2) 質問紙調査の自由記述にみる Grit (やり抜く力)

さらに、興味深い記述として、「諦めない心が育つ」「自己肯定感」との表現があり、これは山北(2017)¹²⁾がいう Grit (やり抜く力) と考えられる。山北は困難な問題や高い壁にぶつかっても諦めない心として、将来の成功を自制心よりも高い精度で予測すると考えられている非認知能力のひとつであると述べている。これらの非認知能力、Grit は欧米を中心に注目されている能力であり、今後の幼児の成長には欠かせないものとなると考えられる。これらの能力はあそびや運動経験から培われるものとしているため、今後の運動あそびの支援においてはこれら非認知能力や Grit を伸ばす仕組みを整える必要があると思われる。

第7章 引用 参考文献

- 1) 舘林拓磨 (2015) 保育士・幼稚園教諭の保育観と運動指導観
教育保育研究紀要,2015
- 2) 柳田信也 (2008) 幼稚園教師の運動遊びに関する指導理念の調査研究
国際学院埼玉短期大学研究紀要,2008
- 3) 吉武信二 (2014) 幼児期における身体教育指導に関する研究
保育士を対象とした実態調査から
大阪府立大学学術情報リポジトリ,2014
- 4) 加賀屋淳子 (2008) 幼児の身体活動量と運動強度
体育の科学 Vol.58:pp604-609
- 5) 保育所保育指針 厚生労働省(2008)
- 6) 幼稚園教育要領 文部科学省(2009)
- 7) 杉原隆・森司朗・吉田伊津美(2004) 幼児の運動能力発達の年次数位と運動能力発達に関する環境要因の構造分析
KAKENHI-project-14380013
- 8) 吉田伊津美(2007) 幼稚園における健康・体力づくりの意識と運動指導の実態
東京学芸大学紀要 総合教育科学系,2007
- 9) 岩崎裕香(2007) 保育者の役割についての研究
保育者の言葉がけが幼児の遊び行動に及ぼす影響について
金沢大学 教育工学・実践研究,2007
- 10) 李 嬋娟 (2014) 非認知能力が労働市場の成果に与える影響について
日本労働研究雑誌、56:30-43
- 11) 無藤 隆(2016) 生涯の学びを支える「非認知能力」をどう育てるか
bend.benesse
- 12) 山北 満哉 (2017) スポーツは Grit を育むのか
体育の科学 Vol.67:pp465-469

謝辞

本研究に際し、指導教授の中村好男先生には構想段階から執筆段階まで1年にわたり適切なアドバイスと丁寧なご指導をいただきました。

深く感謝すると共に心より御礼申し上げます。

また、早稲田大学大学院スポーツ科学研究科でご指導いただきました諸先生方皆様に御礼申し上げます。

本研究に多忙の中、快く調査に協力していただきました保育所所長、園長、保育者の皆様にも心より感謝申し上げます。

さらに、ご理解をいただいた職場の上司、同僚、家族に心より厚く御礼申し上げます。